第１７回　歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）
総会および学術大会

抄録集

会期 ２００６年７月２日（日）

会場 昭和大学歯科病院臨床講堂

大会運営委員

○　運営委員長（大会会長）

深井穫博（ネパール歯科医療協力会，埼玉県三郷市開業, JAICOH 会長）
黒田耕平（日本モンゴル文化経済交流協会，神戸生協協同歯科, JAICOH 副会長）
夏目長門（日本口唇口蓋裂協会，愛知学院大学歯学部口腔外科第二講座, JAICOH 副会長）
○鈴木基之（昭和大学歯学部歯周学講座, JAICOH 副会長）
時田信久（南太平洋医療隊，埼玉県坂戸市開業, JAICOH 理事）
原田祥二（北海道ブータン協会，北海道小樽市開業, JAICOH 理事）
河野伸二郎（神奈川海外ボランティア歯科医療団 KADVO，横浜市開業, JAICOH 理事）
澤田宗久（ＮＰＯ法人ジャパンデンタルミッション，大阪府大阪市開業, JAICOH 理事）
宮田　隆（歯科医学教育国際支援機構, JAICOH 理事）
森下真行（日本歯科ボランティア機構 JAVDO，広島大学歯学部予防歯科, JAICOH 理事）
河村康二（南太平洋医療隊，埼玉県川口市開業, JAICOH 理事）
柴田享子（ＤＨネットワーク, JAICOH 理事）
田中健一（中国北京天衛診療所, JAICOH 理事）
阿倍　智（東京医科歯科大学大学院, JAICOH 理事）
小原真和（有夢会，東京都品川区開業, JAICOH 理事）
有川量崇（日本大学松戸歯学部衛生学講座, JAICOH 理事）
菊池陽一（宮城県伊具郡開業, JAICOH 理事）
白田千代子（東京都中野区北部保健福祉センター, JAICOH 理事）
梁瀬智子（ネパール歯科医療協力会, JAICOH 理事）

後援

日本歯科医師会

プログラム

９：３０　　受付開始　(昭和大学歯科病院６Ｆ臨床講堂前)
９：５５　　開会　(昭和大学歯科病院６Ｆ臨床講堂)

１０：００-１１：４０　口演発表（１）

座長　有川量崇、阿倍 智

１０：００ 国際災害支援における歯科医療の役割‐パキスタン北部地震・医療チームに参加して-
〇村田千年*、玉木真一*
*聖路加国際病院　歯科口腔外科＊＊聖路加国際病院　医事課

１０：２０ KDC-SAS タイ津波被災地救援歯科医療活動
〇志田健太郎１、白数　正義２、藤田　太郎３
１日本大学歯学部　歯科補綴学講座　総義歯補綴学教室
２神奈川歯科大学　成長発達歯科学講座　３神奈川歯科大学　顎顔面外科学講座

１０：４０ スマトラ沖地震による津波被害から１年を経過して
～タイ国における復興の状況とボランティア活動の報告～
〇平田　宗善[1)]、渡邊　宏春[2)]、Martin Peters[3)]、古橋　裕文[1)]、斎藤　元[4)]、町田　宏夫[3)]、川邉　裕美[3)]、秋本　進[3)]、山田　良広[3)]、藤田　晃[5)]、梅本　俊夫
1) 平田歯科医院　2) さくらばし歯科医院　3) 神奈川歯科大学
4) さいとう歯科医院　5)横須賀中央矯正歯科

１１：１０ カンボジア国シェムリアップ州小学校における口腔内検診と口腔保健に関するインタビュー調査
〇高橋亮太、越渡詠美子、松本邦愛
特定非営利活動法人　地球の保健室

１１：３０ 途上国における学校歯科保健の評価
〇深井穫博、中村修一、矢野裕子、平出園子、小原真和、梁瀬智子
ネパール歯科医療協力会

１１：５０　　ＪＡＩＣＯＨ総会

13：00-13：40　口演発表（2）

座長　原田祥二

13：00 JICA 草の根技術協力事業（草の根協力支援型）に応募して：トンガ王国における歯科保健の為のプロジェクト

〇河村サユリ　河村康二

南太平洋医療隊

13：20 モンゴルで『歯科疾患予防プロジェクト(５ヵ年)』を取り組んで

〇黒田耕平　金寿子

日本モンゴル文化経済交流協会

13：40 現地医療スタッフとの給与格差における考察　–人材育成における問題点–

〇田中健一

北京天衛診療所　中国.

14：00　　休憩

14：20-15：40　シンポジウム「国際協力に関する歯学部教育の課題」

座長　黒田耕平、夏目長門

14：20 歯学教育の現状と国際保健-シンポジウム主旨説明

〇鈴木基之

昭和大学歯学部

14：30 日本大学松戸歯学部 国際保健部の活動について

〇木村 匠

日本大学松戸歯学部 国際保健部

14：50 歯科学生の相互理解を深めるための交流目的としたバングラデシュスタディツアーの報告

〇中澤誠多郎１、安本　恵１、山岸桃子１、森川真衣１、奥田智子１、小松　恵１、竹内由紀１、千丈純香１、岩下太一１、大西裕之１、春藤　滋１、相田潤２、森田康彦３、板垣晶博４、滝波修一２

１：北海道大学　Interactive Dental Students’ Alliance for Health Care(IDAH、冒険歯科部)２：北海道大学大学院歯学研究科　３：鶴見大学歯学部歯科放射線学講座　４：北京天衛診療所龍頭クリニック

15：10 ラオス・タイスタディツアー2006 報告

〇白井亮、望月里依奈、山崎加惠、大平貴士、小川奈美、眞木吉信

東京歯科大学国際医療研究会

15：30 国際歯科保健の講義を通して、歯科学生はどのように反応するか
　　○中村修一、深井穫博、平出園子、隅田実希、梁瀬智子
　　ネパール歯科医療協力会

16：15　　閉会
16：30　　懇親会　(昭和大学歯科病院 2 号棟地下ホール)

国際災害支援における歯科医療の役割
- パキスタン北部地震・医療チームに参加して-

○村田千年*、玉木真一**
＊　聖路加国際病院　歯科口腔外科
＊＊聖路加国際病院　医事課

【目的】

2005 年 10 月に発生したパキスタン北部地震災害に対して、聖路加国際病院は 2005 年 12 月～2006 年 3 月にかけて医師（救急部、小児科、内科）・歯科医師（口腔外科）・看護師・助産師・調整員からなる災害医療チームを 5 回にわたり派遣した。歯科医師は後期チームにおいて参加し現地での歯科診療・口腔保健衛生活動を行った。国際災害医療現場における歯科医師の役割について考察を加え報告する

【対象】

パキスタン北西辺境州バラコットおよび周辺山岳地域における被災者

【結果・考察】

歯科医師を含む医療チームは 2006 年 3 月にパキスタン陸軍の設置した避難キャンプ内の医療テント（BHU: Basic Health Unit）において内科医師・看護師・調整員・現地スタッフらと活動を行った。またキャンプ周辺の山岳地帯の村へ巡回診療も施行した。医療テントには 70～80 人/日の患者が来訪した。災害発生より期間が経過していた為外傷の患者は少なく、発熱や下痢、長期間のキャンプ生活による身体の不調を訴える者などが多かった。来院患者の約２割が口腔症状を主訴としており、口腔症状には重度歯周病や口内炎が多くみられた。総じて口腔衛生状態は不良であり、残根状のウ歯を多数放置した状態の患者が多く、不明熱など全身疾患の要因となり得ると考えられた。これらの患者に対して抜歯などの処置の他、現地スタッフの協力を得てブラッシング指導・口腔衛生指導を施行した。その他、キャンプを管理する軍人や現地スタッフの受診希望が多数あった。

災害医療において、災害発生から 0～48 時間の phase0～1 においては救出医療・外科的応急処置が必要とされるが、発生から 48 時間～14 日の phase2 および 14 日以降の phase3 では感染症や慢性疾患のコントロールなど保健防疫対策・更正医療が必要とされる。この時期において歯科医師による専門的口腔ケアの介入は避難所肺炎・感染症の予防などに有効な場合が多いと考えられた。

【結論】

国際災害医療においては多職種によるチームアプローチが必要であり、更生期には歯科医療の介入が有効な場合が多い。歯科医療者も日頃から国際災害医療の準備活動へ積極的に参加・アピールし、国際災害医療における役割を認識することが重要である。

発表者の連絡先（〒、住所、電話、FAX, Email）：
〒104-8560
東京都中央区明石町 9-1　03-3541-5151㈹
聖路加国際病院　歯科口腔外科 muracito@luke.or.jp

KDC-SAS タイ津波被災地救援歯科医療活動

○志田健太郎１、白数　正義２、藤田　太郎３
１日本大学歯学部　歯科補綴学講座　総義歯補綴学教室
２神奈川歯科大学　成長発達歯科学講座
３神奈川歯科大学　顎顔面外科学講座

2004 年 12 月 26 日に発生したタイスマトラ沖地震時に発生した TSUNAMI による被災者に対する人道的歯科医療支援の依頼のもと 2005 年 9 月 19 日～23 日の日程でタイ王国パンガー県タクアパ郡バーモアン地区バーンナムケム村バーンナムケム小中学校において歯科医療支援活動を行ったのでその活動報告をさせていただく。神奈川歯科大学南東アジア支援団（以下、KDC-SAS）は現地の学童、成人を含めた延べ 2857 人の患者に対して現地の医師・歯科医師・歯科助手の協力の下にバーンナムケム小中学校の体育館並びに校舎の一部を口腔内診査、予防歯科教室、予防処置、義歯作成・修理、う蝕処置、抜歯といった 5 つの治療班と 1 つの予防歯科教室に分けて行った。これらの各治療班ならびに予防歯科教室への KDC-SAS 歯科医師、歯科技工士メンバーの振り分けは実行委員長である平田宗善先生の指示の下に行われた。今回の活動は、第一回目の活動であった。これを振り返り、現地の医師・歯科医師と KDC-SAS の歯科医師が協力して一定期間のみの歯科医療支援活動を行っただけでは、求めるべき被災者の口腔環境の改善はいつになっても図れないと考えられる。しかし、歯科の二大疾患とも言われるう蝕、歯周病は今もこの地域では再び蔓延していることだろう。我々はこの流れを断ち切らなければならない。その為に歯科疾患に対する予防の強化と多くの被災者の口腔内に発生した疾患の治療をすることで解決されるであろう。ただ、このことは我々日本人歯科医師と現地の歯科医師の力だけでは達成されることではなく、被災者ならびに現地の教育機関の方々への歯科の知識の啓蒙活動を行い現地の人々による協力なくしては達成されないのではないかと思われる。このことこそ、今後の本プロジェクトの課題として考慮していく必要があるのではないかと思われる。

発表者の連絡先
〒101－8310 東京都千代田区神田駿河台 1-8-13
日本大学歯学部　歯科補綴学講座総義歯補綴学教室
電話：03-3219-8343　FAX：03-3219-8323　E-mail：　shida@dent.nihon-u.ac.jp

スマトラ沖地震による津波被害から１年を経過して
～タイ国における復興の状況とボランティア活動の報告～

○平田　宗善[1)]、渡邊　宏春[2)]、Martin Peters[3)]、古橋　裕文[1)]、
斎藤　元[4)]、町田　宏夫[3)]、川邉　裕美[3)]、秋本　進[3)]、山田　良広[3)]、藤田　晃[5)]、梅本　俊夫
1）平田歯科医院　　2）　さくらばし歯科医院　　3）　神奈川歯科大学
4）さいとう歯科医院　　5)横須賀中央矯正歯科

10 年前よりわれわれはタイ国にて様々な歯科医療活動を行なってきた。2004 年 12 月 26 日にスマトラ沖地震が発生し、この時の津波により多くの方々が被災され、その後直接タイ政府より依頼があり神奈川歯科大学同窓会藤田会長を先頭に被災地への慰問や検診などの活動を始めたのが最初である。神奈川歯科大学南東アジア支援団（以下 KDC-SAS）は 2005 年 6 月に神奈川歯科大学梅本学長を代表に発足され、同年 9 月 19 日～23 日の日程でタイ王室、王立マヒドン大学歯学部、プラティーブ財団、サミティベート病院、王立ソークラン大学、タイ保健省、地域保健所、在タイ日本大使館、タイ外務省の協力のもと第 1 回目の歯科医療活動を計画し延べ 2,857 名の患者に対する処置等を行なった。KDS-SAS の活動は、タイ保健省歯科局により正式な暫定歯科医師免許を交付されたもとで行なわれているのが特長でもある。このような活動を成功させるには、大学だけでは出来ず政治的なつながりも必要であり、特に大切なことは現地の活動支援協力者および地方行政の支援が重要で今後もさらに交流を深めていかなければならないと考えられた。今後の活動は、2006 年 10 月に第 2 回タイ津波被災地救援歯科医療活動を行なう予定であり、さらに 2006 年 5 月 27 日に発生したジャワ島中部地震の歯科医療支援活動も視野にいれ行なっていく方針である。

発表者の連絡先
〒142-0042　東京都品川区豊町 5-1-12　田中ビル 2F　平田歯科医院
電話：03-5498-1260　FAX：03-5498-1261　E-mail：　hira45ma@yahoo.co.jp

カンボジア国シェムリアップ州小学校における口腔内検診と口腔保健に関するインタビュー調査

○高橋亮太、越渡詠美子、松本邦愛
特定非営利活動法人　地球の保健室

【目的】

シェムリアップ州はカンボジアの中でもアンコールワットのある州として有名である。観光地として開発されてきた同州は、海外から嗜好品が流れ込み、農村にまで普及している。しかし、歯科・口腔保健に関する知識は住民の間に普及しておらず、口腔衛生の状況が悪化してきていると言われている。本団体はこの地域において歯科教育に関するプロジェクトを計画している。今回、そのプロジェクトのベースラインデータとするために、シェムリアップ州ポンク郡において腔内検診と口腔保健に関するインタビュー調査を行った。

【方法】

ＷＨＯ で定められた手法に沿って口腔保健に関するアンケートを作成しインタビュー調査をおこなった。加えて、口腔内検診（歯と歯肉の検診）および身体測定（身長と体重測定）を行った。データ収集は現地協力者である看護師、学校教員の協力を得て行った。まず現地協力者に対し３日間の口腔衛生教育・口腔内検診のトレーニングを実施し、今回の調査で用いる手法を習得してもらった。その上でシェムリアップ州ポンク郡の 1－6 学年まである小学校全 41 校で各 15 人の児童にアンケート及び検診を実施した。口腔内検診においては数校において、日本人歯科医師による検診も合わせて行った。

【結果】

都市部の小学校と農村の小学校を比較すると、都市部の小学校の児童のほうが虫歯の数が多いが、歯肉炎においては農村の罹患率のほうが高かった。本団体の指導で、３年前よりフッ素洗口を行っていた小学校では今回行った検診の平均値よりも虫歯が少なかった。インタビューでは、歯磨きの回数や歯磨きの道具においては町の小学校のほうが比較的よい状況であるが、砂糖の摂取は町の小学校のほうが多いことが明らかとなった。また、歯磨きの回数都市部の方が多いものの虫歯と歯肉炎に対する知識や井戸水の使用状況などの環境は両者に大きな差は認められなかった。

【考察】

都市部の小学校は農村の小学校と比べると虫歯が多く、歯肉炎がやや少なかった。
この理由としては、町の小学校の児童は歯ブラシの使用などの口腔衛生習慣が比較的身についているが砂糖の摂取量が多いことが考えられる。食生活に介入し変化させるには長い年月を要すると考えられるので、今後の活動としてはフッ素洗および歯磨きの普及を中心に実施することが有効と考えられる。都市部であっても歯科に関する知識はまだまだ乏しく、歯科に関する教育を行うことによって口腔衛生状況が改善されることが期待される。

途上国における学校歯科保健の評価

○　深井穫博、中村修一、矢野裕子、平出園子、小原真和、梁瀬智子

【目的】

新しい保健プログラムが途上国に導入される場合に，現地がそれを受け入れ普及していくプロセス評価と，どのような成果が得られたかというアウトカム評価はいずれも重要な評価の手法である。しかしながら，しばしば途上国でみられる急激な都市化など生活環境の変化が，プログラムの効果に影響する場合があり，単純なベースラインと比較だけでは十分なアウトカム評価ができない。本報告では，演者らが1994年から支援しているネパールにおける学校歯科保健プログラムの約10年間の成果について口腔保健行動および口腔内状態から評価を試みた。

【対象および方法】

対象地域はネパール王国首都近郊Lalitopul郡のThecho村，Dhapakhel村，Sunakochi村，Chapagaon村の4村とその周辺地域である。調査対象者は，3歳～16歳829名（男性411名，女性418名）であり，インタビューおよび自記式質問紙調査と口腔検診を実施した。質問紙調査項目は，①口腔保健行動，②口腔保健に関する知識・認識，③口腔保健関連QOLの3項目である。統計的解析は，クロス集計と多重ロジスティック回帰分析（変数減少法ステップワイズ，SPSS13.0J）を用いた。

【結果および考察】

（1）プロセス評価：学校歯科保健への取り組みとして，教師への口腔保健専門家養成は1994年から始まり，その受講者数は，Thecho村9校38名（1994年開始），Dhapakhel村7校27名（1998年開始），Sunakochi村6校13名（2001年開始），Chapagaon村10校13名（2001年開始）である。フッ化物洗口は，Thecho村9校1776名（1994年開始），Dhapakhel村7校1425名（1999年開始），Sunakochi村6校775名（2002年開始），Chapagaon村10校1613名（2002年開始）を対象に実施されている。歯科保健教育は，口腔保健専門家研修を受講した教師を中心に年1～2回の歯みがき指導と生徒の口腔内チェックが行われてきた。

（2）アウトカム評価：口腔清掃行動をみると，「歯みがき」および「歯磨剤の使用」は，約90%の定着率であった。「甘味摂取」は38.8～53.4%の者が「週2,3回以上」の摂取頻度を示した。口腔保健に関する知識は，歯みがきとフッ化物の効果，う蝕の原因について，73.9～96.0%の定着率であった。11-16歳を対象とした多重ロジスティック回帰分析（ステップワイズ）の結果，う蝕罹患に関連のある要因には，種族，フッ化物洗口期間，紅茶入り砂糖摂取頻度の3項目が選択された。

【結論】

本研究結果から，学校歯科保健プログラムは，プロセスおよびアウトカム評価でいずれも成果が得られた。今後は，甘味摂取に対する地域レベルのアプローチが必要であると考えられた。

発表者の連絡先：
〒341-0003　埼玉県三郷市彦成 3-86　深井歯科医院・深井保健科学研究所　深井穫博
Email: fukaik@ka2.so-net.ne.jp

「JICA 草の根技術協力事業（草の根協力支援型）に応募して：トンガ王国における歯科保健の為のプロジェクト」

○　河村サユリ　河村康二
南太平洋医療隊

【要約】

南太平洋医療隊は１９９８年よりトンガ王国において　歯科ボランティア活動を行っている。ボランティア活動を行うためには資金の確保は欠かせない。以前は埼玉県より３年間資金の補助を得ていたが２００４年より自己資金にて活動をしている。２００４年１月に JICA 草の根協力支援型事業提案書を提出し、以後修正を重ねた。

事業提案書を作成するにあたり PCM 法の一部を採用し作成する方法を学んだ。２００５年２月に条件付き内定となり JICA からの要検討事項に回答書を作成提出する。２００５年８月に提案書を再提出し９月に採択内定書を受け取る。１１月に JICA トンガ事務所とトンガ政府健康省との口上書（MINUTES）を提出したが、その後外務省レベルの同意が必要との事で FIJI の日本大使館とトンガ王国政府との口上書（MINUTES）が２００６年 4 月に交わされた。５月に１年間の予算書を作成提出しここに至った。この間２００４年に提案書を提出し２００６年５月の実施に至るまでトンガ王国でのボランティア活動は自己資金にて運営し JICA との事業実施まで様々な経過をたどった。今後３年間は JICA との共同事業の形でボランティア活動を行う計画である。２００４年より現在まで私達の活動は徐々にではあるが確実に進化し、現在は学校保健・フッ化物洗口を行う施設、幼稚園・小学校は３０施設約４０００名の児童を対象に実施するようになった。健康省ではワークショップを開催し、町では「歯の健康フェスティバル」を数カ所で開催した。反面２００４年より現在まで自己資金で活動を維持していく大変さを体験した。JICA との提案書の実施までの事務手続きに費やす時間が多く困難であった。本事業の提案書の作成、実施に向けて多大な労を要していただき感謝するしだいです。発表ではトンガ王国でのボランティア活動の経過、JICA との草の根協力支援型事業が採択されるまでの経過と今後の内容を述べ、以降草の根協力支援事業に応募する JAICOH の会員，他のボランティア団体がもっとスムーズに実施されるようになるような布石になればと考えます。

【謝辞】

南太平洋医療隊の活動にご支援・ご協力をいただいた日本大学松戸歯学部社会口腔保健講座、日本大学松戸歯学部国際保健部、トンガ国立 VAIOLA 病院、南太平洋医療隊員　に感謝いたします。

発表者連絡先：http://spmt.jp/　E-Mail:Kawamura@pb3.so-net.ne.jp

モンゴルで「歯科疾患予防プロジェクト(５ヵ年)」を取り組んで

○黒田耕平　金寿子
日本モンゴル文化経済交流協会

【はじめに】「モンゴル人の健康はモンゴル人自身の手で守る」ことをコンセプトに、モンゴルの歯科医療と公衆衛生の向上を目的とした交流活動を続けてきた。交流 10 年目に当たる 2000 年に、歯科診療所「エネレル」(1994 年共同開設)を中心に厚生省、メデイア等の後援を受け、全国２１県で「歯科疾患予防プロジェクト」を立ち上げることができた。それまでの点の活動から面として全国で歯科医療と公衆衛生の向上をモンゴル人自らの手で展開していくこととなった。
【目的】エネレル歯科診療所を中心に両国の間で進めてきた歯科医療交流を、「予防プロジェクト」立ち上げることで全国規模の交流として発展させることを目的とした。また、このプロジェクトを通して、①歯科医療と公衆衛生の向上を目指すモンゴル歯科医師のネットワーク作り、②歯科疾患予防の研修（講義･実習･実践）を体験することで全国規模で予防意識を高める、③他職種との協力関係作りを進め、公衆衛生の効果を高める、④モンゴルの中で「エネレル」の発言力を高める、等も目的とした。
【対象および方法】全国 21 県から招聘した歯科医師各 1 名が、各県で 3 歳児 100 名を選び、各県の行政,教育,メディア等の協力者を作って、歯科検診･アンケートとう蝕予防指導を、5 年間経年的に行うこと。毎年 1 回首都でのプロジェクト会議に経過を持ち寄り,発表,論議するとともに、講義･実習等を受けること。
【結果および考察】郡部ほど遊牧生活者が多いモンゴルで同一個体 100 人、5 年間継続して対象とすることは無理があったようだ。また、政治･経済の混乱が続くモンゴルでは、歯科医師自身も外国へ行ったり、都市部での開業、廃業等々様々な問題によって最終的には 18 県からの参加となった。5 歳児からの検診結果では、各県からの手ごたえとしては対象児のう蝕は少ない傾向にあったとのこと、両親の予防意識が高くなったこと、教育関係者や保護者会、ラジオ･新聞･行政等とも協力ができた等の報告があった。なによりも各県で歯科医師が口腔疾患の予防に他職種の協力を得ながら携わり、実践してきたことは大きな評価と考える。
【結論】今回の「予防プロジェクト」のねらいと成果は、以下の通りである。①モンゴル人自身が公衆衛生･歯科保健予防を実践できる基礎作り。②モンゴル歯科医師の意識改革（治療だけでなく予防の責務、地域保健での役割)。③プロジェクトを通して全国規模での歯科医療と公衆衛生の向上(点から面へ)。④歯科医師のネットワークづくり→独自の新プロジェクト立案･遂行へ。⑤他職種との連携･ネットワークづくり→歯科医師の発言力向上→保健予防の提言。⑥「エネレル」に対する理解と信頼確保→主導的役割でリーダーシップ→日本からエネレルを通じて全国へ発信。⑦エネレル職員の役割自覚と責任感→自信とやりがい→職員の定着。⑧参加日本人ひとり一人が主体となれる活動（グループ分けで前面へ）

発表者の連絡先：
〒651-2109　神戸市西区前開南町 1 丁目 2-25　生協なでしこ歯科
TEL.078-978-6480　FAX.078-978-6056　Email;hpdqm355@yahoo.co.jp

現地医療スタッフとの給与格差における考察　-人材育成における問題点-

○ 田中健一　中国．北京天衛診療所

【緒言】

本診療所は中国．北京市および天津市に在住する邦人に医療を提供する目的で 1999 年に設立された。中国生活において医療機関を受診する際、圧倒的多数の邦人が日本人医療スタッフが在籍する診療所を選択する受診動向がある。しかし、日本人医療スタッフだけではマンパワーおよび専門技能において全てをカバーすることが不可能な場合が多く、医療行為の少なからざるの部分は現地スタッフと共同で行うことになる。その際、現地スタッフへの日本型人材育成が必要になるが、共働するにあたり日本人医療スタッフとの給与格差は大きな障壁となりやすい。現地スタッフと専門分野において良好な共働関係が築けてこそ安心した医療サービスが提供できるが、現実には給与をめぐり多くの問題が発生する。当診療所に実際に在籍したものの退職に至った例を検証し、今後の現地スタッフに対する人材育成について考察したい。

【調査方法】

診療所に在籍した事務スタッフ、医療スタッフの採用，勤務，退職とその理由について 4 例の実例をもとに考察する。

【結果】

失敗例 1；業務は日本人看護師と同じという条件で雇用されたが、現地看護師に日本人看護師と給与面で数倍の差があることが露見してしまった。その格差の理由を「日本人，中国人」という国籍の違いと説明したため、現地看護師が勤労意欲を失い業務に違いはあるものの国籍による給与基準ではなく、能力給のアメリカ系診療所に移るため退職に至った。

失敗例 2；会計業務能力の高さを評価され雇用された事務スタッフが、新規に雇用された PC 能力の低いにもかかわらず自分より給与の高い日本人スタッフに業務を教えなければならなくなり、教える側の給与が低い事に矛盾を感じ退職、スタッフ間に業務の乗り入れの無い職場に移動した。

現在問題発生中；診療室内の雑務を担当するため現地スタッフを雇用した。1 年後、このスタッフより実務年数の長い現地スタッフを新たに雇用した。新しく入ったスタッフの方が物価上昇もあり給与が高かったため、診療中にも関わらず担当医師に説明を求め口論になった。

成功例；多忙につき日本人スタッフの担当する治療の一部を現地スタッフに任せざるを得なくなり、業務を依頼し引き受けてもらい、給与は低くとも十分に満足のいく業務を遂行した。業務に対する対価として給与を昇給した。その後、この現地スタッフは診療所に勤務し 4 年目を迎えた。

【考察】

たとえ診療所が現地スタッフに現地診療所より多くの給与を支払ったとしても必ずしも満足するとは限らない。人材育成は仕事へのインセンティブを向上させることも目的であるが、支払われる給与はこの向上に大きく関係している。一方、日本人との給与格差問題は非常に繊細であるため問題が発生しやすく、海外の診療所に勤務する医療スタッフはこの問題に直面しやすい。この問題を回避するためには現地スタッフが有していない知識、技術、管理能力を持つ必要がある。仕事の満足度、安定、居場所の確保も摩擦解消に寄与する。

連絡先　田中健一　350-1335　埼玉県狭山市柏原 2783　tanaka1963@excite.co.jp

日本大学松戸歯学部 国際保健部の活動について

木村 匠
日本大学松戸歯学部 国際保健部

【目的】日本大学松戸歯学部国際保健部は2000年に学生を中心として設立され、設立当時よりさまざまな団体、先生方に支援を受け、学生による国際医療、歯科保健活動に関する活動を行い、現在に至ります。国際保健部は、スタディーツアーや海外の歯科学生との交流、ボランティア活動、勉強会、講演会等を企画実施し、歯科学生として今、何ができるかを模索し実行することを目的としています。また、この分野における今後の国際協力のありかたについて探り、後に歯科医師となったときにどのように海外と向き合っていくべきかを学ぶことを目的としています。
【活動方法】希望学生をつのり、南太平洋医療隊のトンガプロジェクト参加、歯科医学教育国際支援援機構（OISDE）主催スタディーツアー参加、APDSA(アジア太平洋歯科学生会議)、国際保健に携わっている先生方との勉強会及び講演会、国際医療のシンポジウムへの参加 等・・・
上記の様な開発途上国での活動、国際医療の公演、勉強会を通し、学生の視点であらゆる面に疑問を持ち、行動し、見て、聞いて限られた力の中で自分たちには何ができるのかを考え、学生同士のモチベーション向上を図ります。
【まとめ】自分自身、南太平洋医療隊のトンガプロジェクトに関心を持ち、3度参加させてもらいました。現地の学校でのフッ素洗口および歯ブラシ指導、病院見学、歯科検診の手伝いを通して、ボランティアとはどのようなものか、どのようにあるべきかを体験しながら学ぶことが出来ました。参加した当初は、まだ大学に入ったばかりということもあり、知識不足で何もすることがないのではないかと思いましたが、手作りの紙芝居を通して、子ども達に虫歯の怖さ、口腔清掃の意義を教えることができました。また、逆にこちらが学ぶこともたくさんあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。以前はボランティアという言葉が自分の中であいまいで、具体的にどのようなものなのか分からない部分もありました。単に海外に赴き、一方的に技術や知識を教えるだけのものと考えていましたが、ボランティアとは相手国、地域との相互関係で成り立つもので、またその国が自ら問題に対して考え自立していくことが大切なのだと実感しました。実際に行ってみると、その国の風習、生活習慣、文化の影響でなかなか達成が困難であること、慎重にコミュニケーションを図らなければ一方的な知識、技術の押し付けになってしまうことを身をもって体験することができました。南太平洋医療隊のトンガプロジェクトは、活動もだんだんと地域住民に浸透してきて、いま自立の段階に差し掛かっていると思います。しかし、まだ課題も多く、小児に対しての歯科保健は浸透してきましたが、その親や成人はまだ口腔状態が悪く、モチベーチョンが低い印象を受けました。近年、文明も急速に発展してきており、貧富の差が広がってきています。また去年はじめて障害者施設を訪問して、障害者および障害者の歯科保健に対する考え方が日本のそれと異なり、福祉施設というよりは社会から追いやられてしまっている事実に衝撃を受けました。衛生状態もよくありません。歯科保健分野以外にも、まだやるべきことがあるのではないかと考えさせられました。私たち国際保健部は、こういった経験を各学生が持ち帰り、今後の国際医療のありかたや、いま自分達に何ができるのかを学生同士で話し合いながら、お互いのモチベーション向上を図っていけるものだと考えています。そして一人でも多くの学生が広い視野で医療に関心を持てるよう、活動を続けていきたいと思います。〒270-0031 千葉県 松戸市 横須賀 2-1-20 tel＆fax:04-7139-6639 E-mail: kyan_dog@hotmail.com

歯科学生の相互理解を深めるための交流目的とした
バングラデシュスタディツアーの報告

○　中澤誠多郎１、安本　恵１、山岸桃子１、森川真衣１、奥田智子１、小松　恵１、竹内由紀１、千丈純香１、岩下太一１、大西裕之１、春藤　滋１、相田潤２、森田康彦３、板垣晶博４、滝波修一２
１：北海道大学　Interactive Dental Students ’ Alliance for Health Care(IDAH、冒険歯科部)　２：北海道大学大学院歯学研究科　３：鶴見大学歯学部歯科放射線学講座
４：北京天衛診所龍頭クリニック

【目的】
日本とバングラデシュの歯科学生の交流を通して、文化・習慣・歯科保健などの相互理解を深めること。
【方法】
北海道大学歯学部の学生を中心としたメンバーが、2005 年 12 月 23 日～2006 年 1 月 6 日の期間にバングラデシュを訪問し、大学教育・実習内容、大学生活の紹介を両国の学生同士で行う。また、バングラデシュの歯科大学や病院、巡回診療の見学を行う。
【結果および考察】
ダッカ大学歯学部、バングラデシュ医科大学歯学部、サッポロ歯科大学を訪問し大学の見学、大学の教育や学生生活などの発表、学生間交流をした。学校の設備は日本よりも少なく、学生もほとんど教科書を保有していないが、向学心が非常に強く、資源の不足を補っているように思われた。BIRDEM 病院を訪問し見学をした。無料で受診できる同病院には、患者が殺到していた。また、ダッカ大学の Ahmed 教授らによる Comilla 市近郊の Parchanga 村への歯科・内科の巡回診療に同行し見学、補助をした。月 2 回実施されている同診療での歯科の処置は、抜歯が中心であった。
【結論】
バングラデシュの歯科学生との交流ができて、日本と異なる環境を理解する助けとなった。バングラデシュの歯科学生の熱心さに刺激を受けた。人口が 1 億人を超えるものの、歯科医師数が 3000 人を下回り、その 9 割以上が首都で働くという同国における歯科医療の位置付けは日本と異なるものだと思われた。

この活動は、財団法人ユネスコアジア文化センター（ACCU）の「2005 年 ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業　大学生交流プログラム」による資金援助を得て実施されました。

発表者の連絡先

住所:〒001-0015　札幌市北区北 15 条西 2 丁目 5　テンテラス 312 号

電話:090-8928-0313　Email：composite_resin@hotmail.co.jp

ラオス・タイスタディツアー2006 報告
Report of the study tour 2006 to LAO P.D.R. and Thailand

○白井亮、望月里依奈、山崎加惠、大平貴士、小川奈美、眞木吉信
R. SHIRAI, R. Mochizuki, K. Yamazaki, T. OHIRA, N. OGAWA, Y.MAKI

東京歯科大学国際医療研究会
International Health Forum, Tokyo Dental College

2006 年 3 月-4 月に、社会主義国という政治的な制約の下で経済的な発展が遅れているラオス人民民主共和国と、隣国タイの東北部チェンマイを、歯学部学生 5 名と、歯科医師 1 名が訪ね、歯科保健医療の現状を視察した。

主な活動内容としては、JICA が行っている ” 子供のための保健サービス強化プロジェクト: Kidsmile Project ” の見学、JICA 事務所、ラオス保健省、ラオス国立大学歯学部、マホソット病院、ポンホン郡病院、国際歯科保健センター(ICOH)などを表敬訪問し、現地で活躍されている歯科関係者との懇談、現地小学校の視察を行った。

東京歯科大学国際医療研究会が企画する海外スタディツアーとしてラオスを訪れるのは、今回で 3 回目である。短い期間に、再度ラオスを訪れ、ラオスという国の目覚ましい成長ぶりを確認し、驚くと同時に、今回のスタディツアーを踏まえ、今後、東南アジアを始めとする発展途上国に対して、歯学部学生として、どのような歯科保健アプローチが可能であるか考察した。

発表者連絡先：白井 亮　東京歯科大学 3 年　ryo_shirai@hotmail.com

国際歯科保健の講義を通して、歯科学生はどのように反応するか

○中村修一、深井穫博、平出園子、隅田実希、梁瀬智子
ネパール歯科医療協力会

【目的】

現在、途上国における歯科保健医療の実態は充分とは言えない。従って先進国の国際歯科保健医療協力が必要である。理想的には ODA レベルでの歯科医師養成を含めた総合的歯科保健施策の開発が望ましいが、現実問題として可能性は少ない。ただ、ODA の一つである青年海外協力隊の隊員として途上国に赴任し献身的に歯科保健の向上に寄与するメンバーが徐々にではあるが増えていることは将来に明るい。現状では国際歯科保健医療協力は NGO の活動に委ねざるを得ない。

NGO の国際協力は迅速で自由に展開でき、顔の見える協力が実施できるメリットがあるが、反面、組織力や資金力が脆弱である。また、NGO にとって途上国で活動する専門家の確保が困難である。これには専門家の養成が必要となるが、将来の歯科医療を担う歯科学生に国際協力に関する教育を行い、国際協力に対する理解を涵養することも重要である。演者は歯科学生に国際歯科保健医療について講義を実施、感想文を得て講義に学生がどのように反応したか分析した。

【方法および結果】

講義は 2005 年某国立大学歯学部学生に実施した、講義後 40 名の学生から感想文を回収し分析した。

その結果、講義前の期待度は 58.0%であったが、講義後の満足度は 92.9%と増加した。学生は国際協力に対して柔軟性を有することがわかった。

途上国の現状や歯科保健協力の実際や問題点などの講義に関し理解していると思われる者が 75.0%いた。講義を聞いて国際協力に興味を持った者が 82.5%と関心が高いことが分かった。卒業後の就職の選択肢が広がったと答えた者が 35.0%いた。大学の講義で多くの先生から歯科界が冬の時代との説明をうけ、将来に暗いイメージがあり、希望が見いだせなかった。さらに、歯科の国際協力の可能性が無いと思っていた。しかし、実際の歯科協力プロジェクトをみて選択肢が広がったとの感想が多かった。国際歯科保健医療協力に学生時代に参加していたが 17.5%、歯科医師となった実力をつけて参加したいが同じく 17.5%あった。多くの学生が勉強を自己中心的に考えていたが、歯科も社会性があることに気づいたと率直な感想を述べていた。これらの結果に加え 2005 年に他の大学歯学部において実施した、同じの内容の講義に関し 85 人から感想文を回収したのであわせて報告する。

【まとめ】

歯科学生にたいする国際歯科保健医療学の講義は効果的であり将来に期待できる。

発表者の連絡先：
〒803-8580　北九州市小倉北区真鶴 2-6-1　九州歯科大学
TEL&FAX 093-583-6132　nakamura@kyu-dent.ac.jp

第 17 回　歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）
学術大会プログラム・抄録集

2006 年 7 月 2 日発行

発行人：　深井穫博
大会会長：鈴木基之
発　行：　歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）
〒341-0003　埼玉県三郷市彦成３－８６
TEL　048-957-2268　FAX　048-957-3315